

木野通信 KINO PRESS

KINO PRESS Issue 58 | 京都精華大学広報誌

木野通信

京都精華大学
MAY, 2013 Issue 58

巻頭特集 対談

養老孟司【解剖学者・京都国際
マンガミュージアム館長】 × ウスビ・サコ【人文学部長】

「人文学こそ、 いまの時代に求められる学問。」



58
号

特集 01 FEATURES 01

04 巻頭特集 対談

養老孟司 (解剖学者・京都国際マンガミュージアム館長) × ウスビ・サコ (人文学部長)
「人文学こそ、いまの時代に求められる学問。」

10 教室の外で体験しながら学ぶ 人文学部のフィールドワーク

特集 02 FEATURES 02

12 2013 年度新学部、新学科、新コースがいよいよスタート。

ポピュラーカルチャー学部 (音楽コース、ファッションコース)、イラスト学科、ギャグマンガコース、キャラクターデザインコースの授業紹介

大学ニュース NEWS

14 京都精華大学キャリア支援の取り組みが文部科学省より優秀校に認定／学外スペース「kara-S」がリニューアルオープン／学生食堂「REATA」がオープン ほか

18 学生の飲酒事故に係る取り組みについて

連載企画 REGULARS

20 研究室探訪 マンガ学部マンガプロデュースコース 三河かおり研究室をレポート

教員のブックレビュー ポピュラーカルチャー学部 中伏木寛先生が選ぶ「僕の音楽人生を決定づけた」本

セイカ事典 な行

22 イベント紹介 アセンブリーアワー講演会／デザイン学部建築学科・連続レクチャーシリーズ／石川九楊連続 [公開] 講座 ほか

京都精華大学 学部・学科・コース

■芸術学部

◎造形学科

洋画コース／日本画コース／立体造形コース

◎素材表現学科

陶芸コース／テキスタイルコース

◎メディア造形学科

版画コース／映像コース

■デザイン学部

◎イラスト学科

イラストコース

◎ビジュアルデザイン学科

グラフィックデザインコース／デジタルクリエイションコース

◎プロダクトデザイン学科

プロダクトコミュニケーションコース／ライフクリエイションコース

◎建築学科

建築コース

■マンガ学部

◎マンガ学科

カートゥーンコース／ストーリーマンガコース

マンガプロデュースコース／ギャグマンガコース

キャラクターデザインコース

◎アニメーション学科

アニメーションコース

■ポピュラーカルチャー学部

◎ポピュラーカルチャー学科

音楽コース／ファッションコース

■人文学部

◎総合人文学科

特集 01

Talk with YORO Takeshi × Oussouby SACKO

京都精華大学が運営する京都国際マンガミュージアムの館長・養老孟司と、今春新たに人文学部長に就任したウスビ・サコの対談が実現した。

ベストセラー『バカの壁』の著者としても知られる養老の専門は解剖学。しかし、哲学から思想、社会学はもとより、ゲームやマンガにいたるまで、その探究心は幅広い。それは、「人間」に対する、とどまることを知らない探究心だ。一方、アフリカ・マリ共和国出身のウスビ・サコの専門は建築学。中でも空間やコミュニティと人間の関係に注目し、人文学的見地に立った研究を行っている。ともに学問領域にとらわれず、「人間」という存在について考えてきたふたりが、いま人文学を学ぶことの意義について語った。

サコが学部長を務める人文学部は、「体験主義」「国際主義」「学際主義」の3つを学びのキーワードにしている。京都精華大学は、1989年の人文学部開設以来、文献を中心に学問のかたちに一石を投じ、「体験主義」を実践するべく、カリキュラムのなかにフィールドワーク（現地調査）を採用してきた。2014年度入学生からは、3年生前期の半年間を学外で学ぶプログラムを導入し、フィールドワークの手法により重点をおく。ふたりの言葉を借りるなら、フィールドワークには「身体化」という作用がある。現場に身を置き、五感をつかって自分自身、また他者を知ることが、人間への理解に繋がっていく。この「身体化」した学びこそ、フィールドワークという手法の醍醐味で

あり、本質なのだ。

また、京都大学で教養教育の改革方針が出されるなど、教養の重要性がここに来て再認識されはじめているが、養老は対談のなかで恩師の言葉を借り、次のように定義する。「教養とは、人の心がかかる心だ」。そしてこう続ける。「要するに人間の理解ってことですよね。人を人として理解する。よくはそれに尽きると思っんです」。

養老の言葉は、教養という言葉で解説しながらも、人文学とは何かという問いをも見事に突いている。

言い方を変えれば、人文学こそ、現代に求められる「教養」なのではないだろうか。この対談のなかに、その答えが散りばめられてい

2013年4月、京都精華大学の人文学部長にアフリカ・マリ共和国出身のウスビ・サコが就任した。また、人文学部の2014年度入学生からは、3年生前期の半年間を学外で学ぶプログラムが導入される。そのカリキュラムの意図とは。京都国際マンガミュージアムの館長を務める養老孟司との対談から、人文学の魅力と学問の本質が浮かびあがってきた。

巻頭特集 対談 養老孟司 × ウスビ・サコ

人文学こそ、いまの時代に求められる学問。



養老孟司 YORO Takeshi

解剖学者・東京大学名誉教授。京都国際マンガミュージアム館長。東京大学医学部卒業後、1981年から95年まで東京大学医学部教授。96年から2003年まで北里大学教授。著書多数。89年には『からだの見方』でサントリー学芸賞を受賞。『バカの壁』は、03年のベストセラー第1位になり、同年度の毎日出版文化賞特別賞と流行語大賞を受賞。

ウスビ・サコ Oussouby SACKO

人文学部教員。2013年4月より人文学部長。専門は居住空間や建築計画など。アフリカ・マリ出身で、北京語言大学、南京東南大学を経て、京都大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了。博士（工学）。著書に『知のリテラシー・文化』、論文に『バマコの集合居住の生成と中庭型在来住宅の形成過程の考察』など。

学問は本来繋がっている

——サコ先生はもともと建築学がご専門ですが、人文学と建築学の繋がりは？

サコ 私が建築のなかでとくに関心をもっているのが住宅です。住宅というのは単なる箱ではなく、そこに住む人の居住形態であるとか、価値観であるとか、あるいは行動であるとか、そういうことを色濃く反映しているんですね。つまり、人文学的な観点から建築を見ていくんです。

——養老先生の専門は解剖学ですが、解剖学と人文学の接点とは？

養老 僕が北里大学で教員をしていたときに「人間科学」という教科書を書きました。これを英語に訳すと「humanistic sciences」なんです。結局、これ人文科学なんです。日本の学問は、明治時代に西洋でできあがった学問の枝葉を取り入れたので、根っこが一緒に切れてちゃっているんですよ。

だから、人間の科学っていう意味でいえば、建築学も医学もそう変わるわけじゃないんです。だって人を相手にするんですから。患者さんを見てりゃ、住んでいる家から仕事から全部関係しているわけですからね。頭で考える学問も重要だけど、人間形成という面で、経験による身体化はもっと重要なことなんです。本来は、大学がやることではないかもしれませんが。

養老 いや、大学で教えることは時代によって変わっていいんじゃないですか。大学がこうでなきゃダメっていうことはないんだから。僕は解剖を教えていましたけど、あれは一種のフィールドなんです。実習に出す死体は全部違う人ですから、個体によって学ぶことは違うんですよ。こっちの死体でこうだったからって、隣も同じってことはないんです。おもしろいことに実習が終わると学生たちがちょっと大人になるんです。

——具体的にはどういうふうに？

養老 見ればすぐにわかりますよ。要するにものを考えるようになります。3ヶ月の間、死んだ人でも同じ人と付き合っていたら、「この人ってどういう人だったんだらう」って誰でも考えると思いますよ。そういう経験がなければおそらく考えなかつたであろう

けですからね。

——そういう教育は先生の学生時代にはあったのでしょうか？

養老 ありませんね。やっぱり人文科学は人文科学という形ではつきり分かれちゃってましたから。今の受験科目をみても、学部ごとにはつきり分けられているから、学生はみんな違うもんだと思っ

て入学してくる。僕の専門は解剖でしょ。解剖っていうのは人間の身体なんです。これって本来はひとつじゃないですか。僕が解剖で一番強く意識しているのは、ひとつだったものをバラバラにしているってことなんです。もともとは同じというか、繋がっているってことです。学問も同じです。

——すべての学問は「人間」を扱っているといえるのですか。では、サコ先生、京都精華大学の人文学部の特徴とは？

サコ 精華の人文学部は開設当時より幅広い観点から物事を追究する「学際主義」を貫いています。また、社会の現場で学ぶ「体験主義」も大切にしています。来春入学する学生からはカリキュラムを改編し、3年生前期の半年間

うことを考え出す。だから僕は何も教える必要がないんです。

サコ 私が思っているフィールドワークも、そういうことなんです。同じ場所で3ヶ月も過ごせば、いろんな疑問がわいてくるんですよ。

——自分ごととして考えるという作業も大事になると思います。

サコ そうですね。だからなるべく若い時期に出た方がいい。いろんなものと触れ合うことによって、価値観が変わってくると思うんです。そこから就職に対しての考え方も変わっていく。多くの学生は、自分がどういう人間になりたいのかを考えずに、会社名が書かれたリストをみて就職活動し

教養とは、人の心がわかる心

を学外で学んでもらいます。そのフィールドワークの機会を利用して、学生たちにはいろんなところで、シヨックを受けてほしいなと思っ

ています。本当は1年間行っ

てほしいんですけど(笑)。実際は難しいので、数ヶ月間その場所に住んで、そこにいる人と触れ合っ

てほしいんです。国内でも海外でもいい。そのことによって、自分が見えてくるし、いろんなことも見えてくる。いまの学生は、知的好奇心が発揮できていない。フィールドワークを通してシヨックを与えることで、もっと批判的にものを見ることもできるし、視野を広げることができるとは、なかなか思うんです。

——多少無理をしても、学生にはフィールドに出てもらいたいというのでしょか。

サコ そういうことです。いまはイギリスの情報を見ようと思えば、パソコンのマウスをクリックすれば出てくる。そこで学生は行った気になってしまふ。でも本当は、そこに身を置くということが、すごく重要なんです。イギリスはいつも天気が悪いといっても、行ってみないとわからないわけですよ。身を置くことで受ける刺激によって、我々のもっている五感を改めて働かせることができるんじゃないかと思っ

ています。

——いまのお話を聞いていると、身体的な体験をすることで得られるものが、教養になるのかなと。

サコ いまの学生たちが受けている基本的な基礎教育は、うまく体系化できていないように思います。学生たちは興味や関心で授業を取るけど、それぞれの科目がどうリンクしているかについては説明されてない。単にフィールドワークでもまれるだけでも得るものはあると思いますが、そのために基本となる情報は座学に加えて、現地でも収集してほしいですね。その情報が現地で行るんなものに触れることで、はじめて身体的に得た知識になる。

——養老先生は長い間大学で教鞭をとられていますが、多くの大学で一般教育、教養教育課程が解体されて以降、学生の教養が落ちたと感じられることはありませんか？

養老 そんなことはあまり考えていません。東大を出てから北里大学で7年ぐらい教えましたけど、

養老 お気づきでしよつかね。いまの生活って、その五感を使わないように使わないようにしているんですよ。冬は暖房、夏は冷房で快適でしょ。灯りは1日中点いているし。太陽は動いていますけど、電球は動かないもんね。理想的な建築だと電気も太陽のように昇ったり沈んだりしなきゃいけないだけだ(笑)。

サコ アフリカに学生を連れて行くと、みんな星に驚くんですね。そして、現地の人たちは、星に驚いている日本人に驚くんです(笑)。星は日本でも見ようと思ったら見られるんですよ。要するに、本来は自分で身体化しているはずのことが、五感が働かないようにしているから身体化できなくなっているんですよ。

フィールドワークを通して学生はものを考え出す

——外に出ではじめて気づくことがあるということですね。

サコ そうです。外に出ることによって自分のもっている常識が、一気にくつがえされるんです。自分の当たり前が、どこでも通じると思っ

てはしくないんです。それを、もうちょっと広い意味で考えると、いまの学生は協調性を考えてか、みんな当たり前のように同

いわる一般教育、教養ですね。さっきサコさんがおっしゃった通り、現代の日本って身体性が非常に落ちているんですよ。それは間違いない。人間が身体をもった存在だということに、極端にいえば気づいていない。僕は「教養」って言葉は今まで自分では一度も使ったことはないんです。あまりきちんと定義できない言葉は使わないようにしているから。ただ、僕の恩師が教養について語った言葉があるんです。「教養とは、人の心がわかる心だ」って。人間の理解だということですよ。人を人として理解する。僕はそれに尽きるところなんです。そういうことが根本的な意味の教養なんです。「マリの人も我々と同じ心をもっていてでしょ」ということをわかっていくのが教養なんです。

サコ 養老さんがおっしゃったように、大事なものは心なんです。教養というのは、自分の生き方を考えるっていうこと。それによって周りやいるんなものが見えてくるんです。

養老 じつは、それがまさに「哲学」なんです。日本語の「哲学」は、本来の意味と全然違うようになってしまった。「西洋哲学を勉強すること」が、「哲学」になっちゃった。

サコ 日本語の「哲学」って、西



無理に出かけるんじゃないなくて、
いまいる場所でも、
フィールドワークは
可能なんですよ。

何でもいいから
からだを動かさせて
言いたくなりますよ。



洋の哲学者がどういうふうに見えるのか、たかつかって歴史なんですよ。当然自分が考えるうえで知識としてあってもいいけど、本来の哲学ってというのは、自分で考えて疑問をもつことなんです。よく授業で学生たちに国際問題を話すと、「国際問題は興味ない」とか言うんですよ。でもマリ人の私が日本の君たちにいま教えているんですよ。不思議に思わない？ それ自体が当たり前と思われたら、私もどうしていいかわからないんですよ（笑）。

——疑問をもたない学生たちにどういう懸念をもたれますか？

サコ これからの日本は、いろんな国の人と一緒にやって仕事や生活をしなくちゃいけない。そのときに、他者について考えることはとても重要です。自分が関係ないと思っても、向こうから関わってきますからね。これからは個々が自分の立場、自分の文化、自分の地域をふまえたうえで、具体的に考えていくことがすごく重要になってきます。

養老 日本では伝統的に、身体化することを修行と言ったんです。いま、修行ってほとんど死語になっていて、『ドラゴンボール』にしか出てこないけど（笑）。『ドラゴンボール』は、まさにからだとしょ。人間って逆立ちしてもか

らだから出られない。しかも、頭で考えられる時間は1日のうち最大3分の2しかないんですよ。3分の1は意識がない。その間でもちゃんと動いているのがからだなんです。そうすると、からだの方がはるかに本質的というか、大事なものであってことがわかりますね。でもそこがいまの教育ですつぽりと抜け落ちていっているんです。たぶん学生は、からだはなくていいと思っているんじゃないかな。そんな学生には、何でもいからからだを動かさせて言いたくなりますよ。

遠くへ行く必要はない
今いる場所も
フィールドなのだ

サコ 別に遠くに行かなくてもいいんですよ。毎日同じコンビニに通って、そこで商品がどう動いているかを見るだけでもいいんです。自分の周りにも宝物がいっぱいあると思うんです。無理に出かけるんじゃないで、いまいる場所でも、フィールドワークは可能なんです。

養老 そう、どこでもフィールドなんです。建築家の藤森照信さんたちが路上観察学会で町を観察していたけど、京都なんかおもしろい町ですよ。

サコ そうなんです。私自身がずっとやっているのも観察です。観察をしていると、日本の社会がいろいろと見えてくる。いくらでも好奇心がわいてくるんですよ。疑問は一個でいい。そこからどうやって広げていくかってことです。そういう最初の好奇心が重要だと思えますね。

京都精華大学の学生って元気がいいんですよ。いたるところにおもしろい学生がいる。彼らもっと好奇心をのばせば、いろんな可能性が生まれると思います。とくにフィールドワークを体験した学生は、かなり本質的なところが変わるんですよ。人間について考えるかもしれないし、もしかしたら社会に対する関わり方っていうのも自分で模索して見えてくるんじゃないかなと思いますね。

養老 サコ先生にお聞きしたいんですけど、日本の社会って暗黙のルールが非常にきついでところだと思いませんか？ 世間ともいえるんですけど。

サコ 私は日本に来て、いい意味でも悪い意味でも、日本人としてすごく自分の文化を大切にしているなと思ったんです。だからお互いに暗黙のルールで厳しく監視し合うんだと思うんです。私が日本で生活するとなったら

きに、最初は日本人の真似をしようと思ったんですよ。でもすぐにこれは無理だなと感じました。自分のからだには合わないなって。逆に私が日本に合わせることで、日本人は私から得ることが少なくなるなと思っただけです。私が私であるってことが大事だ。そういう経験からも人文学部っていうのは、いろんな人、いろんな宗教、いろんなからだを受け入れる人間を育てる場所だと思っただけです。

——最後に、養老先生から人文学部に期待するところを教えてください。

養老 サコ先生みたいな方を学部長に選ぶのは、大変いいことだと思います。日本の大学ってきちっと固まっています。で、当然それは変えたほうがいいです。でも特に意識しなくても、サコ先生が学部長だというだけで、自然といい影響が出てくるんじゃないかと思えますね。楽しみにしています。

取材日 2013年4月7日
場所 京都国際マンガミュージアム
取材・原稿 林宏樹
写真 石本正人
コーディネート 光川貴浩 (Bank to)



教室の外で体験しながら学ぶ 人文学部のフィールドワーク

人文学部では、教室を飛び出し、現地で体験しながら学ぶ「フィールドワーク」という調査研究手法を重視している。その土地に身を置き、人に会い、見て、聞いて、身体全体で感じることで、知ることの幅を広げ、考えを深めていくのだ。教室の外で体験しながら学ぶことによって得られる力とはどのようなものか。人文学部で現在実施されている、現地体験型授業「国内・海外フィールドプログラム」に参加した2人の学生へのインタビューを通して紹介する。

Interview 01

国内フィールドプログラム (京都)

竹元 冴矢さん 人文学部 3年生

京都プログラムのテーマは「〇〇から見える京都」。観光地をまわるだけでなく、お寺で座禅をしたり、和菓子をつくったりと、いろんな視点から京都を体験。後半は、グループで現地調査を行いました。私たちのグループは町家に注目。カフェやショップといった、町家の新しい活用法について調べました。いくつかのお店を訪問し、店長さんにインタビュー。現地調査の前に文献を調べ、町家の図面も見ていたのですが、町家ごとに坪庭の位置や大きさが違うのも、行って初めてわかったことでした。実際に見ることで、新たな発見や気づきがありましたね。プログラムに参加するまでは、建物にそれほど興味はありませんでした。今では、京都の町を歩くと、すぐに町家に目とまるとなるように。少し視点が変わったように思います。



Interview 02

海外フィールドプログラム (フランス)

宮本 董さん 人文学部 4年生

フランスでのプログラムに参加しました。マルセイユではジャパンエキスポに精華のブースを出展。他の国の文化から見た日本文化を理解するのが目的です。ブースでは、舞妓さんや折り紙などの日本文化を紹介するワークショップを実施。私の担当は浴衣の着付けでした。言葉は通じなかったのですが、とても喜んでもらって。会場にはアニメのコスプレをしていた人も多かったので、フランスの人からすると浴衣もコスプレなのかもしれないですね。パリでは、各自が設定したテーマについて現地調査を行いました。私の調査テーマは農業。日本では農業って大変そうないメージですが、フランスでは若い人たちが従事している。農業の見本市に行ったとき、牛や羊が並ぶ中で子どもが遊んでいる光景を何度も見ました。小さい頃から身近に農業や畜産が存在するから、食や農業について考えるようになり、自分の仕事として選んでいく。現地に行ったことで、日本とフランスとの違いが理解できました。



さらに進化する人文学部のフィールドワーク

2014年度入学者より、人文学部のカリキュラムが改編される。その中心となるのは、3年次前期の半年間を大学の外で学ぶフィールドワークにあたる「プロジェクト演習」。演習地は、国内では京都や北海道、沖縄、海外はタイや韓国となる予定。どの地域もほかにはない文化をもち、それぞれ固有の社会的問題を抱えている。同じ演習地であっても、学生それぞれが伝統芸能や行事、食、環境問題など、自分の興味や関心にもとづいてテーマを設定し、調査研究を行う。はじめての土地に長期間赴き、人々の暮らしに深く入り込むことによって、身体全体で感じながら自分のテーマを追究する。学びの幅が広がるだけでなく、さまざまな経験を通して、人間としての成長も得られるプログラムとなっている。また、「プロジェクト演習」を補完するために、2週間から1ヶ月程度、国内外の現地で学習を行う「短期フィールドプログラム」や、調査方法、記録、情報発信の手法を学ぶ科目も豊富に用意される。「体験主義」「国際主義」「学際主義」を学びの柱とする精華の人文学部。海外をふくめた社会の現場に長期間赴いて、体験しながら学び、多様な観点から人間や社会を見つめる。来春から、人文学部の学びがさらに進化する。

特集 02

Topics | Faculty of Popular Culture, Department of Illustration, Gag Manga Course, Character Design Course

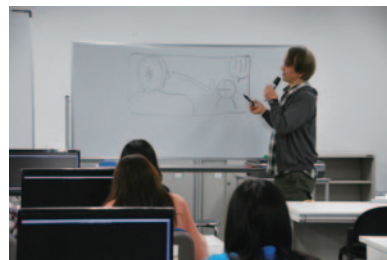
デザイン学部イラスト学科

イラスト学科は、「描く」ことと「伝える」ことを追求し、フィールドを問わず活躍する人材の育成をめざす。1年次は手で描くことを中心に表現の可能性について広範囲に体得する期間。「イメージ表現」「立体表現」といった科目では創造力や構想力をやしなひ、描画力をみがく「デッサン」や技法習得科目の「日本画」「水墨画」を通し、イラスト表現の基礎を固めていく。「イメージ表現」の授業では、スポットでぼたぼたと紙の上に絵具やブリーチ剤を落とし、色彩の変容を楽しむ。そして色彩から受けたイメージを言葉に変換することに挑戦する。このような課題を通し、イラスト表現のための基礎トレーニングを積み重ねていく。



マンガ学部キャラクターデザインコース

1年次はキャラクターデザインに必要な「絵とアイデア」の基礎力をみがく時期。アイデアの見つけ方、膨らませ方を体験する授業「キャラクター造形基礎」では、まず小説さし絵の課題に取り組む。学生同士で各自が考えたキャラクターの講評を行うなど、チームでの仕事が多いキャラクターデザイン分野に欠かせないコミュニケーション力も身につける。



マンガ学部ギャグマンガコース

「アイデア・発想千本ノック」と題し、笑いに関する知識と発想法を学び、実際にアイデアをつくっていく1年次。ギャグマンガ家・おおひなたごうが担当する授業「ネームドリル」では、各々がつくったキャラクターで、笑いを誘う1ページのマンガを制作。頭の中でイメージした笑いを絵に表現する力をやしなう。



2013 年度新学部、新学科、新コースがいよいよスタート。

今年の4月より、京都精華大学に新たにポピュラーカルチャー学部（音楽コース、ファッションコース）、イラスト学科、ギャグマンガコース、キャラクターデザインコースが開設された。ともに1年目となる教員と学生とがつくるその授業は、緊張感と活気に満ちている。その一部を紹介する。

ポピュラーカルチャー学部 音楽コース／ファッションコース

音楽コースの1年次は、音楽の構造を学び、音づくりやレコーディングの基礎技術を身につける期間。技術をみがく一方で、ポピュラー音楽の歴史や、伝説的なミュージシャンの仕事、音楽とそのほかの文化の関係性など、理論面からも音楽を学んでいく。「基礎実習1」の授業では、音に向き合う姿勢をやしなうことを目的に、楽曲の音にとどまらない、環境音やノイズなど身の回りのすべての音に意識を向けていく。また、自分から積極的に音を出して表現すると同時に、他人の出す音にも関心をもつために、グループもしくは個人で楽器や楽器ではないものを使っての即興演奏を行う。授業の中では、楽曲制作に必要な音楽制作ソフトの基本的操作を習得する回もある。



ファッションコースの1年次では、ファッションに対する自分の考え方の確立と、縫製やパターンの技術の習得が目標となる。身体と手をつかって、心地よい服とは、素材とは、人間の身体に添うかたちとはどんなものかを学びとっていく。また、ファッションとメディアの関係、他のカルチャーとの関係などを理論の側面から学ぶ授業も開講している。デザイナーの柳田剛が担当する「基礎実習2」は、ファッションのつくり手としての下地を整えるための授業。服がもつ特有の問題や魅力、目的などを身体的に感じ、意識したことをかたちにしていく。服と人の身体の関係性や、「装う」という行為、服のかたちや素材について、手と身体を動かして学んでいく。



音楽、ファッションの両コースの学生がともに学ぶ授業も開講している。1年次で受講できる「企画演習」は、ミュージシャンの高野寛やBose、レディガガのシューズ制作を担当するデザイナーの舘鼻則孝、京都を中心に活動する劇団・ヨーロッパ企画らが担当。企画のつくり方やアイデアの出し方など、クリエイターとして必要な力を身につける。



01 京都精華大学キャリア支援の取り組みが優秀校に認定

京都精華大学は文部科学省「大学教育・学生支援推進事業」【テーマB】学生支援推進プログラムに採択されたキャリア支援プログラム「クリエイターデビューを目指す表現者のキャリア形成支援」の取り組みを、2009年度より3年間にわたって実施してきた。その取り組みが、昨年、学生支援推進プログラム評価委員会による評価において、【S/A/B/C】の4段階のうち、「目標に沿った取り組みが実施されており当該目標を十分に達成している」と総合評定【S】の評価を獲得。その後に行われた、実績評価や実地調査の結果、「優秀校」として認定された。採択された465件のプログラムのうち、特に優れた取り組みとして認定されたのは、本学のプログラムを含め25件となる。

この取り組みは、2012年度以降も継続して実施しており、2011年に設立したキャリアデザインセンターの支援活動とあわせて、今後さらに学生のキャリアサポートを充実させていく。

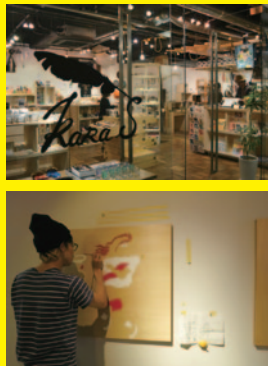
02 学外スペース「Karasu」がリニューアルオープン

5月に、四条烏丸の商業ビルCOCON KARASUMAにある学外スペース「Karasu（カラス）」がリニューアルオープンした。

新しいKarasuは、展覧会やワークショップ、イベントなどを行う「ギャラリー/スタジオ」と、アートグッズの販売を行う「ショップ」の2つのスペースで構成される。

今後は、大学の教育研究活動の成果を社会へ発信する拠点としての性格をより強め、学びと直結したスペースとして、在学生や卒業生の作品展示やイベント発表、作品販売を行う場として活用するほか、さまざまなクリエイティブな活動によって生みだされるアイデアや作品を発信していく。

また、リニューアルオープンを記念して、在学生と卒業生によるライブイベント「イングリッド」を開催。まるで3人の作家のアトリエをのぞくような体験に、多くの観客が足を止めていた。



03 学生食堂「REATA」がオープン

京都精華大学第二の学生食堂である「REATA（旧れあた）」が4月よりリニューアルオープンした。

和食中心のメニューから、学生に人気のパスタやサンドイッチなどにメニューを一新。内装も、作品展示やイベントがしやすいよう有機的な空間に様変わりした。学生、教員、職員が集い、語らえる場となるよう望まれている。

また、リニューアルに伴い坪内成晃学長がロゴをデザイン。店の入り口に続く特徴的な階段が取り入れられた。

REATA
kyoto seika uni. restaurant



04 2013年度 新任教職員

◎芸術学部

松浦直子（日本画コース）

岸雪絵（版画コース）



松浦直子



岸雪絵

◎デザイン学部

岸本敬子（イラストコース）

ケツソクヒデキ（イラストコース）

山口義順（イラストコース）

福岡南央子（グラフィックデザインコース）

松村慎（デジタルクリエイションコース）

荒井良二（客員教授）

大西麻貴（客員教授）

Gary Paige（客員教授）



岸本敬子



ケツソクヒデキ



山口義順



福岡南央子



松村 慎



荒井良二



大西麻貴



Gary Paige

05 2012年度 退任教職員

◎芸術学部

三宅良史（日本画コース）

木下長宏（客員教授）

塩田千春（客員教授）

◎デザイン学部

角谷和好（グラフィックデザインコース）

高尾茂行（プロダクトコミュニケーションコース）

シヨンコース）

福田恵子（プロダクトコミュニケー

ションコース）

安藤真吾（ライフクリエイションコース）

後藤直子（建築コース）

Matthew Au（建築コース）

塚本由晴（客員教授）

Andrew Zago（客員教授）

◎マンガ学部

大西祥平（マンガプロデュースコース）

吉見貴司（アニメーションコース）

富野由悠季（客員教授）

三宅克（客員教授）

りんたるう（客員教授）

◎人文学部

中尾ハジメ

平井愛

池田浩士（客員教授）



青井俊樹

◎事務局

青井俊樹



ツトム・ヤマシタ



Pierre Barouh



西谷真理子



Bose



谷口文和



落 晃子



藤原ヒロシ



柳田 剛



蘆田裕史



近田春夫



佐久間正英



細野晴臣



山縣良和



中道友子



中伏木 寛



高野 寛

2013年度大学人事体制

理事長 赤坂博
学長 坪内成晃
専務理事・常務理事(総務担当)
上々手良夫
常務理事・副学長(教学担当)
新井清一
常務理事・副学長(学生担当)・キャリアデザインセンター長 武田恵司
常務理事(企画担当)・企画室長 関口正春
理事 杉本貞彦
理事 安村幸駿
理事 高瀬哲
監事 崎間昌一郎
監事 位ノ花俊明
監事 堂山道生
芸術学部長 島本淳
デザイン学部長 佐藤守弘
マンガ学部長・国際マンガ研究センター長 吉村和真
ポピュラーカルチャー学部長 斎藤光人
人文学部長 ウズビ・サコ
大学院芸術研究科長 相内啓司
大学院デザイン研究科長 井上斌策
大学院マンガ研究科長
Jaqueline Berndt
大学院人文学研究科長・教務部長 恩地典雄
全学研究センター長 姜竣
情報館長 宮一穂
学長室長 福岡正藏
教務部事務部長 細谷周平

学生部長 板倉豊
学生部事務部長・キャリア支援室長 高橋勇
社会連携センター長 志賀晃一
入学部長 小西通博
入試広報部長 石田涼
総務部長 鳥居本基代枝
京都国際マンガミュージアム館長 養老孟司
京都国際マンガミュージアム事務局長 上田修三

07

2013年度在学生数(2013年5月現在)

芸術学部 864名
デザイン学部 764名
マンガ学部 867名
ポピュラーカルチャー学部 93名
人文学部 976名
大学院 138名

08

教員の活躍

著作をはじめ、講演会 作品発表など、京都精華大学の教員の活躍を紹介する。
◎著作(2013年3月〜5月発行)
『覚書 幕末・明治の美術』
酒井忠康(芸術学部客員教授/美術評

人と人が本当につながるために必要な大人の知的作法とは?雑誌『ダ・ヴィンチ』連載の書籍化第2弾。
◎CD(2013年3月〜5月発売)
『fish for ~ music vol.3
"Sound from Cafe, Restaurant, Bar&Radio"』
高野寛(ポピュラーカルチャー学部音楽コース教員/ミュージシャン) / fish for music
タワーレコード限定販売のコンピレーションアルバムに参加。

『Play for Japan 2013 vol.1 ~ Landscapes in Music ~』
高野寛(音楽コース教員/ミュージシャン) / OTOTOY
復興支援アルバムに『輝かな光』のセルフカバーで参加。

『Heavenly Music』
細野晴臣(ポピュラーカルチャー学部客員教授/ミュージシャン) / ビク
ターエントテインメント
2年振り全曲ボーカル・アルバム。
アン・サリィ、岸田繁(くるり)、坂本龍一、Salyuも参加。

◎ライブ

日比谷野音90周年記念、スチャダラパーワンマンライブ「23」。

論家)

近世後期・幕末から明治初期までの近代日本美術の揺籃期、誕生の時期に関する美術評論。

『バリ散歩画帖』
山本容子(デザイン学部客員教授/銅版画家) / 朝日出版社
スケッチしながら散歩する旅のスタイルのすすめ。

『水草水槽のせかい すばらしきインドア大自然』
タナカカツキ(デザイン学部客員教授/マンガ家) / リトルモア
ふとしたきっかけから水草水槽に魅せられた著者がマンガと大量の図版でおくる、画期的入門書。

『コアンビー』
おおひなたごう(ギャグマンガコース教員/マンガ家) / 集英社クリエイティブ
おもちゃを買い与えるだけじゃつまらない。ギャグマンガ家の父が真剣に息子と遊び倒す子遊びエッセイ。

『ラストエグザイルー銀翼のファムーエアリエルログ』
村田蓮爾(キャラクターデザインコース教員/イラストレーター) / エム
ディエヌコーポレーション
キャラクターデザインを手がけたアニメ『ラストエグザイル』のその後の

Dose(音楽コース教員/ミュージシャン)
【開演日時】6月16日(日) 17時
【会場】日比谷野外大音楽堂
【問い合わせ】ホットスタッフ・プロモーション 03-5720-9999

『Heavenly Music』リノサート
細野晴臣(ポピュラーカルチャー学部客員教授/ミュージシャン)
■京都公演
【開演日時】6月1日(土)・2日(日) 18時半
【会場】京都・磔磔
【出演】細野晴臣(Vo/G)、高田漣(G)、伊賀航(B)、伊藤大地(Dr)
【問い合わせ】清水音楽 06-6357-3666(平日12時〜17時)

■東京公演
【開演日時】6月8日(土) 18時
【会場】東京・日比谷公会堂
【出演】細野晴臣(Vo/G)、コシミハル(Acc)、高田漣(G)、伊賀航(B)、伊藤大地(Dr)
【ゲストアクト】岸田繁(くるり)
【問い合わせ】サンライズプロモーション 東京 0570-00-3337

世界を描いた『ラストエグザイルー銀翼のファムー』を徹底解説。

『海月姫』11巻
東村アキコ(マンガ学部客員教授/マンガ家) / 講談社
第34回講談社漫画賞受賞作。独特のセンス溢れる東村ギャグと切ない恋模様が入り混る!

『主に泣いてます』10巻
東村アキコ(マンガ学部客員教授/マンガ家) / 講談社
「生まれ変わったらブスになりたい。明るくて面白くて誰からも愛される素敵なブスに……」向島川沿い美人協奏曲、これにてハッピーエンド!?

『セックス・ドリンク・ロックンロール!』
みうらじゅん(マンガ学部客員教授/マンガ家) / 光文社
僕は美大一年生。青春をこじらせて、どんな気がする?悩みつつ弾ける18歳の日々を描いた会心の長編小説。

『キャラ立ち民俗学』
みうらじゅん(マンガ学部客員教授/マンガ家) / 角川書店
著者にかかれば、エロだろうがグズだろうが祭りだろうが、世の中にあるすべての現象が深い!些細なコトにも鋭い視点を注ぐ、民俗学エッセイ。

09

ストーリーマンガコース2年生が『別冊マーガレット』でデビュー

マンガ学部ストーリーマンガコース2年生の山本まどさん(ペンネーム)が、『別冊マーガレット』4月号(集英社)において、作品「視線の先に」でデビューした。また時期をあけず、別冊マーガレット増刊号『bianca』Vol.3(集英社)にも読み切りマンガが掲載された。

10

人文学部卒業生が「日本絵本賞」大賞受賞

人文学部卒業生のミロコマチコさん(画家・絵本作家)の著作「オオカミがとぶひ」が「第18回日本絵本賞」において大賞を受賞した。ミロコさんとはTBSのテレビ番組「情熱大陸」でも取り上げられた、いま最も旬の絵本作家。今後も、絵本の出版や挿絵の仕事が多数予定されている。

『大坂将星伝(下)』
絵：山田章博(マンガ学部客員教授/マンガ家) / 講談社
「本意」を貫き通し、家康の前に最後まで立ちはだかった漢、毛利豊前守勝永の生涯を描く、不屈の戦国絵巻。ここに堂々の開帳!
『西遊記(新装版)』
絵：山田章博(マンガ学部客員教授/マンガ家) / 講談社
孫悟空がつぎつぎとあらわれる妖魔を相手に戦いをくりひろげる物語。
『直伝指導!実力派プレイヤーへの指標 How to be a professional player?』
「ロジカルなプレイヤー」目指すこと
佐久間正英(音楽コース教員/アーティスト) / リットーミュージック
レコーディングをとおしてアーティストを育て上げる能力に定評がある著者が、多くのプロにも支持された独自のトレーニング方法を解説。
『指導死』
住友剛(人文学部教員)他 / 高文研
いじめ自殺だけではない子ども自殺を、学校での懲戒、叱り方、指導の仕方とともに考える。
『本当の大人の作法 価値観再生道場』
名越康文(人文学部客員教授/精神科医)他 / メディアファクトリー

学生の飲酒事故に係る 取り組みについて

2010年11月27日、当時芸術学部1年生の学生が急性アルコール中毒で亡くなりました。大切な構成員を失った悲しみとともに、教職員一同この事態を招いた責任の重さを痛感いたしました。

事故の直後に「飲酒事故防止対策委員会」を発足させ、二度とこのようなことを繰り返さないよう検討を重ねてまいりました。爾来、学内は全面禁酒とし、学舎・宿舎を含め飲酒を全面的に禁止して、現在に至っております。また、飲酒に関する教育プログラムを実施し、新入生には初年次の必修科目において、在学生には各学部・コースの少人数クラス単位で、飲酒について議論し、私たちのあるべき姿を語り合う機会を持ちました。学生自治会においても、事故防止のための今後のあり方について検討を続けてきました。

2012年3月21日、学生自治会執行部から「れあたでのアルコール飲料の販売について」の提案書が出されました。事故を風化させないこと、今後事故を起こさないための意識と環境をつくることに重点を置いた提案内容でした。第2次飲酒事故防止対策委員会はこれを検討した結果、提案の趣旨をほぼ了承し、「れあた」での飲酒を基本的に認める方針を確認し、その旨を学長に報告しました。同年4月19日の教職員合同会議では、この方針について教職員で議論いたしました。今春より、「れあた」での酒類販売を再開するにあたり、教職員に対して、わが大学の「教育の基本方針」の再確認を求めるとともに、京都精華大学の構成員として真摯に取り組んでもらうよう要請しました。

岡本清一初代学長による「教育の基本方針に関する覚書」には、次のような一節があります。「学内における学生の自由と自治は尊重され、その精神の涵養がはかられる。従って学生は、学内の秩序と環境の整頓に対して責任を負わなければならない」。「礼と言葉の紊れが、新しい時代にむかって正され、品位のない態度と言葉とは、学園から除かなければならない」。そして、「教員の学生に対する愛情責任は、親の子に対するそれが無限であるように、無限でなければならない。職員もまた教員に準じて教室外教育の一斑の責任を負わなければならない」。

禁酒の状態を続行する、あるいはルールを設けて管理主義的に行動を制限するのは、ある意味容易な取り組みといえますが、私たちはその方法を選択しません。学生と教職員が「れあた」という場所に集い品位をもってお酒を嗜むことで、本学だからできる教育のかたちとして、飲酒のあり方に真摯に向き合いたい。各学部教授会および事務局会議において、このことを教職員に直接説明し理解をお願いしました。

過去3ヵ年の卒業生を含め、学生、および教職員は、この飲酒事故から多くのことを学んだことと思います。そして、今後も学び続ける必要があると感じています。あの日から2年半という年月が経過しましたが、事故の記憶を風化させず、わが大学の教育理念である「人間を尊重し、人間を大切にすること」を念頭に、今後も、教育の場において飲酒について知り、考えるプログラムを継続したいと思います。

皆様方のご理解とご協力をお願いいたします。

京都精華大学 学長

坪内成晃



「Peace」藤本理子（2012年度 グラフィックデザインコース卒業制作）

セイカ事典 へ行

京都精華大学に関わりの深い人、事、物を解説する。

な 中原佑介【なかはらゆうすけ】

1931 - 2011. 美術評論家。79年から02年まで美術学部、芸術学部教員。うち、80年から3年間は学長を務める。京都大学理理学部を卒業後、同大学院湯川秀樹研究室で理論物理学を専攻するが95年以降美術批評の道に進む。70年東京ビエンナーレ「人間と物質」をはじめ、パリ、サンパウロ、ヴェネツィアビエンナーレなど多数の国際展の企画に携わった。

7-23 ギャラリー【ななにさんぎやらりー】

芸術学部洋画コース、立体造形コースの学舎である「7号館」3階にあるギャラリー。洋画コースの学生が自主運営する。1992年、学生が自分たちの手で教室をギャラリーへと改造し、現在にいたる。

に 人間形成のための教育【にんげんけいせいのためのきょういく】自由自治の教育、国際主義の教育、凝集教育とともに京都精華短期大学開学時に旗印として掲げられた教育方針のひとつ。

ね ネコバス型パン窯【ねこばすがたばんがま】

2009年秋に鹿野苑につくられたネコのかたちをした窯。人文学部板倉豊先生のゼミ生が制作した。薪をくべて温度調節をしながらパンやピザを焼くことができる。

の 登り窯【のぼりがま】

1999年、朽木学舎に設置。薪を使って焼く、旧来の焼成方法を用いる窯。1230℃の高温を保つため、人力で灰をかぶせ続ける必要がある。陶芸コースの学生が利用するほか、申込みをすれば一般の方も利用が可能。



研究室探訪

先生の研究室、授業を訪ねて。

マンガ学部 マンガプロデュースコース 三河研究室

三河かおり
マンガ学部マンガプロデュースコース教員。フリー編集者。20代女性向けのマンガ雑誌「ヤングロゼ」編集部を経てフリーに。「のだめカンタービレ」などを担当。

20年以上マンガ出版業界に身を置き、いまでも編集者として活躍する三河かおり先生。教鞭を執るマンガプロデュースコースには、マンガの原作者や編集者を目指す学生たちが集う。

そこで三河先生が受け持つゼミは3つ。ひとつは卒業制作ゼミ。あとのふたつは自主ゼミ（学生が自主的に集まり学ぶゼミで、単位は出ない）だ。三河先生が授業外の時間を使い、自主ゼミをつくる理由は「授業では大人教員に教えるため平均的な指導になってしまいうけど、少人数制のゼミでは一人ひとりにがーっと入り込んで個別の才能を伸ばすことができるから」。伸びしろのある学生の個性をできるだけ多く引き出したい、そんな思いからなのだろう。また、「目指すなら売り物」と、明確なターゲットや狙いを設定した、高いレベルの発表をゼミ生には求める。その成果は、今春の三河ゼミの卒業制作で顕著に現れた。マンガやライノベルの制作、マンガの広告戦略など、それぞれの視点でプロデュースした力作がそろった。京都駅から近隣の書店までのマンガの広告戦略を考えた学生は、三河先生が担当するプロのマンガ家作品のプロモーションビデオを制作。実際にサイン会場で流したところ好評を博し、学生の企画が実践でも通用することを証明した。

「編集の仕事が続いているのは単に世話好きだから」と言うが、教員として学生の個性を見抜くことは、編集者としてマンガ家の潜在能力を引き出すことに通じているはずだ。さて、自ら三河ゼミに飛び込んだ学生たちは次にどんな才能を開花させるのだろうか。ヒットの法則を塗り替えるような作品、それをゼミ生が生み出す日もそう遠くはないだろう。

Book Review

教員のブックレビュー

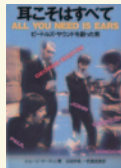
ポピュラーカルチャー学部・中伏木寛先生が選ぶ「僕の音楽人生を決定づけた」本



僕はずっと環境音楽(BGM)を作っていて、音を通じて百貨店や工場現場の雰囲気改善などに関わってきました。また、米国のBGM会社から音楽のジャンル分けを依頼され、何万曲という膨大な音源を聞いてデータベースを作る仕事もしました。そんな僕が読む本は、やっぱり音楽関係のものが多くです。

「耳こそはすべてービートルズ・サウンドを創った男」は、ビートルズのプロデューサーをしていたジョージ・マーティン氏の伝記的一冊。ロックにオーケストラを仕込む、なんて音づくりはビートルズのメンバーだけでは思いっかなかったでしょう。クラシック出身だったジョージがいたからこそ、ビートルズの音楽は完成したと思います。楽器を習いはじめたときって、指の

訓練だとか譜面通りに弾かなきゃいけないとか、一般的に制約のなかで音楽を強いられまますよね。僕はそれが嫌で、小さいころにピアノから逃げたことがあって。でもこの本を読んで、やっぱり「耳こそはすべて」なんだと改めて気づいたんです。本当は制約なんて必要なくて、譜面が読めなくても耳さえよければいい音楽を作ることができるな、と。僕は音楽雑誌の企画や執筆にも関わっていました。それが「J-ROCK magazine」。担当した最初の記事は大黒摩季さん、次の記事がB'zで、筋肉少女帯なんかも記事にしましたね。仕事で聴くまでは、興味のないアーティストが多くて（笑）。だけど、じっくり聴くと音楽の系譜がわかったり、意外な楽器を使っているなとか、いろいろな発見がありました。



「耳こそはすべてービートルズ・サウンドを創った男」ジョージ・マーティン (河出書房新社)
後の音楽プロデューサーの役割に影響を与え、数々の名曲を世に送った男が語る、創造の秘密や知られざるビートルズとのエピソード。



「J-ROCK magazine」(ジェイロックマガジン社)
2001年まで7年間刊行された、関西発の音楽雑誌。掲載したアーティストたちのそれぞれの世界観を詳細に書き、日本の音楽ファンから絶大な支持を集めた。



「サブカルで食う 就職せず好きなことだけやって生きていく方法」大槻ケンヂ (白夜書房)
サブカル界で活躍してきた著者が、定職につかずに「サブカルで食う」ために必要なことを赤裸々に書いた一冊。

3冊目は前述の筋肉少女帯、大槻ケンヂさんの「サブカルで食う 就職せず好きなことだけやって生きていく方法」。彼がおもしろいのは音楽オタクじゃない視点で音を作っていた、ということ。歌詞が歌舞伎の見栄の口上だったりね。好きな曲を作って聴いているだけでは、音楽で食べていくのは難しいことを教えてくれます。また大槻さんは、プロになるために必要なものとして「才能・運・継続」を挙げています。「一番大切なのは『継続』でしょうね。音楽で一生食べていく、つまり音楽を自分のモノにするためには、好きでもないアーティストの曲を一日中聴いて、なぜ嫌いなのかを考えたりとか、それを継続してできる力が必要です。「好きこそ物の上手なれ」と言いますが、学生たちには「好き」という言葉を自問自答し続けてほしいですね。



中伏木 寛
ポピュラーカルチャー学部音楽コース教員。工場から放送局・百貨店まであらゆる業種を顧客に音楽を使ったコミュニケーション・コンサルタントを仕事とする。

イベント紹介

京都精華大学に関するイベントを案内する。一般の方も聴講、参加が可能。

●アセンブリーアワー講演会

開学の1968年から行われている公開トークイベント。あらゆるジャンルから一流のゲストを迎える。

- 園子温（映画監督）
 「『非道に生きる！』映画と人生と世界をつなぐ」
 【日時】 5月30日（木）16時20分～17時50分
 【場所】 京都精華大学黎明館L101
 【申込】 不要
- 岸田繁（くるり・ミュージシャン）
 「くるり解体新書」
 【日時】 6月13日（木）16時20分～17時50分
 【場所】 京都精華大学黎明館L101
 【申込】 不要

●デザイン学部建築学科・連続レクチャーシリーズ
「2013年前期プログラム可能性の空間」[空間論演習1]

建築コース教員、ゲスト講師が空間をめぐる対談や講演を行う。

- 「海洋都市アマルフィの繁栄の秘密」
 陣内秀信（建築史家／法政大学デザイン工学部教授）
 【日時】 6月1日（土）13時～
 「その場所で生まれるさまざまなこと」
 いししんじ（作家）×津田朋延
 【日時】 6月8日（土）13時～
 「クール・ジャパン推進の取り組みとデザイン政策」
 外山雅暁（経済産業省商務情報政策局クリエイティブ産業課デザイン政策室室長補佐）
 【日時】 6月15日（土）13時～
 「空間、および時間の存在をめぐって」
 森田大剛（カフェ+ギャラリー「SOI」代表）×津田朋延
 【日時】 6月29日（土）13時～
 「Healing Lightingー建築化照明でつくるグラデーション」
 家元あき（ライティングデザイナー）
 【日時】 7月6日（土）13時～

「ニッポンのものがつくり〜中量生産編」
永田宙郷（EXS Co.代表／プランニングディレクター）×片木孝治
【日時】 7月13日（土）13時～

「モダニズムと震災以降」
 鈴木隆之（建築家／小説家／建築コース教員）
 【日時】 7月20日（土）13時～

【場所】 京都精華大学 風光館F331
 【申込】 不要

●デザイン学部・デザイン研究科教員石川九楊連続「公開」講座
「国字論」東アジア文明圏とは何か

石川九楊（デザイン学部・デザイン研究科教員）による連続公開講座。

- 【日時】
 第1回 6月20日（木）国字とは何か
 第2回 7月18日（木）日本の国字I
 第3回 8月26日（月）日本の国字II
 第4回 8月27日（火）中国と中国周辺の国字
- 特別企画 8月28日（水）石川先生と書くガリ版演習会
 ※定員あり。事前申し込みが必要。毎回13時～14時30分
- 【場所】 京都精華大学 春秋館S201
 【申込】 特別企画以外は申込不要
 【問い合わせ先】 京都精華大学教務課

（片田・西島）TEL 075-702-5129
●「寺田克也」コト10年展

マンガ家、イラストレーター寺田克也氏のカラーイラストや設定画など作品（原画を含む）約300点を展示。関連イベントとしてライブドローイングやトークイベントも開催。

- 【期間】 6月30日（日）
 【場所】 京都国際マンガミュージアム 2階ギャラリー1・2・3
 【開館時間】 10時～18時（入館は17時30分まで）
 【休館日】 毎週水曜

●京都精華大学オープンキャンパス

すべての学部・コースで授業体験や学生作品の展示、個別相談を開催。名古屋・金沢・福井・天王寺・三宮・明石・高松・岡山から無料送迎バスを運行する。

- 【日時】 6月8日・9日（土・日）
 7月27日・28日（土・日）10時～16時
 【場所】 京都精華大学
 【申込】 不要
 www.kyoto-seika.ac.jp/opencampus/

京都精華大学とは

京都精華大学は表現の大学です。2013年4月にポピュラーカルチャー学部を開設。さらに、デザイン学部にはイラスト学科、マンガ学部にはギャグマンガコース、キャラクターデザインコースを新設しました。ポピュラーカルチャー、芸術、デザイン、マンガ、人文あわせて5学部編成となり、新しい文化と社会を創造する人材育成をさらに進化させていきます。

ご支援くださるみなさまへ～ご寄付のお願い～

様々な支援に関して、ご寄付のご協力をお願いしております。

「学生奨学金制度への支援」、「学生生活への支援」、「文化振興活動への支援」、「国際交流活動の支援」、「教育・研究設備整備事業への支援」より寄付用途を選んでいただき、みなさまのご意向にかなう運用をしています。お申し込みは、銀行窓口、もしくは、インターネット上でのクレジットカード決済にてご寄付いただけます。この寄付金は、文部科学省から「特定公益増進法人であることの証明書」の交付を受けており、税金控除の優遇措置を受けることができます。詳細につきましては寄付募集 Web サイト、リーフレットをご覧ください。

●寄付募集 Web サイト
 www.kyoto-seika.ac.jp/donate

●お問い合わせ
 京都精華大学企画室寄付募集担当
 TEL：075-702-5201 / FAX：075-702-5391 E-mail：kikaku@kyoto-seika.ac.jp

◎卒業生の方へ
 「木野通信」送付先住所の変更は、企画室・木野会事務局までご連絡ください。
 E-mail：kinokai@kyoto-seika.ac.jp FAX：075-702-5391

木野通信 KINO PRESS

58

木野通信 第58号
 2013年5月20日発行

京都精華大学 入試広報部 広報課
 〒606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
 TEL：075-702-5197
 www.kyoto-seika.ac.jp

木野通信とは、京都精華大学が発行する広報誌です。

京都精華大学

芸術学部 / デザイン学部 / マンガ学部 / ポピュラーカルチャー学部 / 人文学部